

京都 東福寺 雪景色

九条 之子

京都は、なんと、六十一年振りの積雪だそうだ。

(私が生まれる一年前以来ということか……)

「京都は、雪が降る方が、むしろ暖かいんです。」観光バスのガイドは言う。

新春二日、実家の沼津に寄ってから、京都にやって来た。パック旅行のため、三島から一旦新横浜まで戻り、改めて「のぞみ」に乗り換えて京都に向かった。東京に戻る娘とは、東京行きの新幹線の中で別れた。新横浜のホームで新幹線の中の娘に手を振ったが、娘は気が付かなかった。やっと空いた席に座るのに夢中のようにだった。

それにしても、大変な半日だったと思う。なにしろ、私が実家に行ったのは、六十一年振り、まではいかないが、二十一年振りのことだからだ。何故に二十一年振りかと言えば、それはすなわち、父に「敷居を跨がせてもらえなかった」からである。

二十一年前、私は「駆け落ち」をした。その時、私には夫もいたし、息子と娘もいた。

そして、相手の男性は、私よりも二十二歳も年下であった。その少し前、私は夫から、

「お前、女盛りだなあ」

などと、時々褒められ、いや、からかわれたりしていた。が、私の駆け落ちは、当然の如く、成就できずに、私は「家」に、つまり夫と子供たちのもとに戻ったのである。その後、私はかなり粘り強く、家族の再生のために頑張ったが、やはり一度壊れた家庭は維持することが出来ずに、七年前、息子と娘を連れて正式に離婚した。しかし、私は、仕事運だけはあるようである。

今現在も、東京郊外の日本語学校で、日本語教師として働いている。ただ、そん

な私を、郷里の沼津にいる両親や妹・弟達は許してはくれなかったのだ。二年前、こんな葉書を父から貰った。

「あなたが家の敷居を跨ぎたかったら、弟に頭を下げなさい。弟が許さない限り、あなたが入りするのは、難しいでしょう。早く家に来て、弟に頭を下げてください。但し、私がこんな手紙を書いたことは黙っていて下さい」

私は、父の最後の一文が気に入らなかった。「私がこんな手紙を書いたことは、黙っていて下さい」というくだりである。

反対ではないか。「私が間に入るから、私に免じて、弟に頭を下げてください」と言うべきだろう。

そう言われれば、私は悔しくても、弟に頭を下げる。でも、そうでない限り、私は弟には頭を下げるたくはない。相手は、弟である。私は長女だ。もし相手が「兄」だったら、とは思うが、相手はとにかく「弟」なのである。とは言え、今年、私は「未年」の「還暦」である。母は私と二周り違う未年であるから、八十四歳になる。そして、父は、母と四つ違いの八十七歳である。

今年を逃したら、永久に父母と対面することはできなくなるかもしれない。そんな思いが、私に沼津行きを決意させた。

「お父さんに追いつ返されたりしたら、悪いけど、お父さん、ちょっと『おかしい』と思う」

職場の親友が言ってくれたこの言葉が、私の背中を押してくれた。

「こんにちは」「ごめんください」

玄関は開いていた。都会ではないので、玄関の鍵は、余程でない限りかけてはいない。それは、昔と変わっていないようだ。ただ、娘と二人で、いくら声をかけても応答はない。

「いないのかなあ……」と、娘。

「いないわけないよ」とは言ったものの、

「帰ろうか……」という言葉が、思わず出てしまう。いないわけはない。でも、応答がない。これは、このまま帰れということなのだ。それの方がいい。その方が楽だ。

「ねえ、テレビの音が聞こえるよ。箱根駅伝みたい」

父は、昔から箱根駅伝の大ファンなのだ。

なんとなくホッとした気分になったのもつかの間、見知らぬ男が、突然家の中から現れた。

いや、見知らぬ男ではない。私の弟だった。二十一年振りに見る弟は、随分と変わっていた。

そうは言っても、父と似てきたと言えなくもない。

「なんだよ！」

と私の顔を見ながら言う。言うことは、いつも率直で、厳しいところは、相変わらずのようだ。

「顔を見せに来た……」

「連絡もなにもよこさないで」弟が、凄んで見せる。

敷居を跨がせてくれなかったのはあんたじゃないの、という言葉は私にはかろうじて飲み込んだ。

「帰るよ！」つい言ってしまった。

「意地張ることないじゃない」と、娘。

「上がりな、緑ちゃん」

と、娘に声を掛けた弟は、私に向かって、それでも言ってくれた。

「お父さんと話していったら」

私は、ああ、許してくれたんだと思った。父は車いすだったが、自分の書齋で机に向かっていた。母は、居間で私と娘をにこにこ迎えてくれた。

「緑ちゃんと、ゆっこさんが来てくれたよ！」と弟。母は弟の言葉をなぞって、

「緑ちゃんと、ゆっこさんが来てくれたの？」

と言って、私達をしげしげと見まわしたが「緑ちゃんと、ゆっこさん」が誰なのかわからないようだった。母は認知症のようだ。が、トイレとかは自分で出来るそうだ。

父と母と弟の三人の家庭に、嫁はいないようだった。

「月に一度くらいは来てよ」

「来ていいんなら、もっと来る……」

「そんな無理しても、続かないぜ」

弟は淡々と話すが、八十四歳と八十七歳の両親の世話は、大変に違う。

「お風呂とかは、デイサービスだし……」

テレビや、新聞や本などで目や耳にする事柄が、急に身近なものとなって迫って来る。

「介護、するよ」

「そんな甘いもんじゃないぜ」

いや、これからは二十一年を取り戻そうと思う。

ビールで乾杯をし、娘と二人で、実家を出た。

敷居を跨がせてくれなかった時の傷心をいやすために、京都のホテルを予約してあったのだ。

「じゃ、今度は一月三十一日に来るね」

そう言って別れて来たが、私は、次回は一人で、泊りがけで来るつもりだ。

（今度は、エプロンも持ってこよう……）

不思議だけれど、母が少しほけていて、救われたような気もした。そうでなければ、二十一年振りの親子の対面なんて、もっと辛いものになったはずだ。

つくづく親不孝な娘だと思いつつながら、三島駅から新幹線に乗った。窓から見える富士山は、一年に一度あるかないか、くらいに綺麗に見えた。

帰ってこいよ、と富士山は、私に言ってくれていた。

JR奈良線、東福寺駅で降りて歩くこと十分。奈良線を使って、奈良までは、新春に三年も通ったのに、東福寺駅には降りたことがなかった。が、今年は、決意して降りてみた。

参道に店が並んでいる、という訳でもないのに、正月だというのに、歩く人はまばらだ。

（ああ、来てよかった……）と、心から思う。

六十一年振りの雪の京都、二十一年振りの実家の沼津。そんな私の心に、ぴたりと寄り添ってくれるような、寺のたたずまいだ。通天橋からの眺めは、すべてを雪が覆い尽くし、これからの新しい道を私に示してくれるようだった。

更に奥へと進むと、本殿の前に、庭が広がっている。

奈良は仏像、京都は庭、という言葉が浮かんだ。

賽銭を投げたあと、道なりに進んで、縁側で腰を下ろした。他の参詣の人達も、

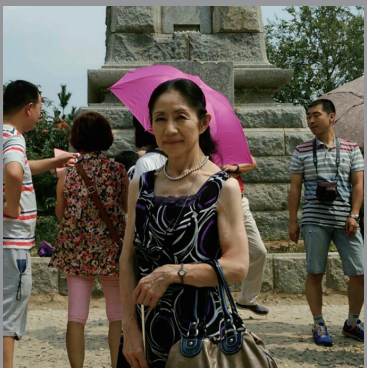
縁側にすわり、じっと庭を眺めている。庭も木も真っ白な世界なのに、寒さはそれほど感じない。

「京都は、雪が降る方が、暖かなんですよ」

というバスガイドの言葉が思い出された。縁側に座った人々は、何も語らずに、ただ白い庭を眺めている。

(でも、この中で、私ほど幸せな人はいないだろうな……)

雪で覆われた庭は、私の心を映して、真っ白に輝いていた。



プロフィール

生年 一九五五年一月二十六日生まれ

出身 静岡県沼津市

学歴 静岡県立沼津東高等学校から
早稲田大学政治経済学部政治学科卒業

在住 東京都

現在 東京平田日本語学院 教務主任

受賞歴 第九回「文芸思潮」エッセイ賞 入選
第十一回「文芸思潮」エッセイ賞 奨励賞

著書

二〇〇三年七月、新風舎より「黒ねこは知っている」
二〇一二年十二月、日本文学館より「ヴィーナス」
二〇一五年十月、日本文学館より「夢舞台」を出版